

2022年2月12日(土)

老球の細道655号

スポーツ用具の進化は技術の進化に

会津バスケットボール協会 室井 富仁

北京冬季五輪スキージャンプ混合団体で、1回目のジャンプがスーツの規定違反で失格となった高梨沙羅選手のことを話題になっている。私も今まで冬季五輪においては常に高梨選手に注目してきた。ルックスのみならず、いつもワールドカップでは常勝なのだが、なぜか五輪では勝てない、どうしてだろうと。今回も金メダルは取れなかった。

しかし今回気づいたのは「沙羅ちゃん、かわいそう！」ではなくて、ジャンプ競技におけるスーツの影響力だった。ジャンプ競技のスーツには細かなルールがある。体の部位によって、基本的に男子は1～3センチ、女子は2～4センチのゆとりしか許されない。高梨選手は飛んだ後の検査で両太ももが2センチ大きいと判断されたという。男子のラージヒルジャンプでは股下が1～2センチ下がっただけで飛距離が5～10メートルものびることがあるそうだ。競技規則と記録の狭間でスーツのメーカーは研究に鎬をけずる。

同じようなことが過去に水泳競技でもあった。2008年頃から話題になった英国スピード社製の「レーザーレーサー」である。これを着用した選手が世界記録を連発。日本の北島康介選手もしかり。水着の素材に問題ありと、その後この水着は使用禁止となった。

最近では箱根駅伝の厚底シューズの問題があった。アディダスがスポンサーだった青山学院大学が箱根駅伝で全員ナイキの厚底シューズを履いて優勝した。そのために、それまでルールになかったシューズの底の厚さに規定が作られた。スポーツは日頃の鍛錬や技術だけではなく、靴やスーツなど用具の影響によって記録が伸びたり、技術が向上したりする。

バスケットボールにおいても同じである。シューズ、ボール、体育館のフロアなどの品質向上がどれだけスキル、プレイの向上、人気の向上に貢献してきたことだろう。特にシューズの進化はバスケットボールの革命だと思う。

私は中学時代にバスケットボールを始めたが、その頃はまだ今のようなバスケットボールシューズはなく、ゴム底の学校体育シューズか裸足でプレイすることが不自然ではなかった。その証拠に、当時の県中学校大会女子部で優勝した浪江の請戸中学校チームは全員裸足でプレイしていたのである。劣悪な体育館のフロアでよくケガしなかったものである。

高校でオニツカタイガー(現アシックス)の「ファブレ」(布製)、大学でようやくレザーシューズを履くことができるようになった。その後、ナイキシューズの出現により私のプレイも進化した。特にストップとジャンプに大きな影響を与えた。捻挫のケガも少なくなった。赤と黒のエア・ジョーダン(?)ハイカットを履いて色々な大会に出場すると、相手選手は皆私のシューズに目を奪われて、私は簡単に抜くことができた(なんちゃって!)

技術や競技の普及のために競技用具の開発、改善は必要である。競技規則との両立を目指してこれからも色々なドラマが繰り返されるのだろう。今のところバスケットボールシューズに対する規定はないが、ジャンプ力が伸びるシューズができたらどうなるのだろう?